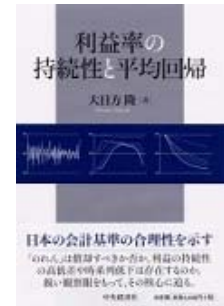


受賞作品

# 利益率の持続性と平均回帰

大日方隆著

中央経済社 4,v,339 ページ、4400 円（税別）



書評

## 企業会計を実証的に解明

神戸大学教授 桜井久勝

企業の利益率は長く持続するものか、それとも産業平均へ向けて早く回帰する傾向が強いのかを、法人企業統計の個票データを用いて実証的に解明した労作である。

いま日本の会計基準は、国際基準との統合を目指して新設や改正が進められているが、企業利益の概念と指標や、M&A（合併・買収）で取得したのれんの償却の要否など、残された相違点もある。これに対し、著者が本書で提示する実証的証拠を基礎として、日本の会計基準の合理性について主張する結論は、視点の適切さと現代性において優れている。

具体的には、利益率の平均回帰傾向の描写には、のれんの規則的償却が必要なこと。平均回帰速度は利益の種類ごとに相違するから、当期純利益を尊重し、経常利益も表示する区分損益計算書は合理的であること。利益率の持続性の歴史的な低下傾向は、競争の激化などに起因しており、日本の会計基準の陳腐化を示唆するものではないことの3点がそれである。

さらに本書では、多様な実証分析方法の反復的な適用により、分析結果の頑健性の確認に十分な配慮が行われている。本書が示す分析の堅実性や着実性は、後に続く研究者の手本となるだろう。利益率の平均回帰傾向は欧米企業にも共通するが、欧米でのれんの規則的償却を行わないのはなぜか。著者も認識する未解決の論点がいくつか残されているが、企業会計の喫緊の課題に堅実な手法で取り組んだ優れた研究書である。